

クオリティ・オブ・ライフ(QOL)の話

ある調査によると、日本人は大人になるとあまり音楽を聴かなくなるそうです。そういえば私の場合は、映画をあまり観なくなりました。最近はその気になればネット配信やレンタルのおかげで気軽に観ることができますが、映画館となると時間に縛られることもあり、敷居が高いのです。そこで意識して久しぶりに何回か映画館へ行きました。まずは一時期話題になった「ボヘミアン・ラプソディー」。ほぼ同時代にクイーンを聴いていた世代の私は、ストーリーの超シンプルなまとめ方に驚きましたが、フレディ・マーキュリーの生命の発露の仕方や、マイノリティであることによる葛藤を昇華させていく様が素晴らしかったです。

次は「アリー／スター誕生」です。ド派手なイメージだったレディ・ガガがじつはとてもチャーミングで、終わる頃には好きになっちゃいそうでした。ベタベタのラブストーリーが吹っ飛ぶくらい歌も素晴らしかった。自分も彼らのように、ひと目や常識にとらわれず、もっと正直に、生々しく生きていいのではないかと頭を揺さぶられて帰ってきました。

そしてもう一つが「がんになる前に知っておくこと」という映画です。これは、ある若い女性が、いま日本で活躍しているトップレベルのがん領域のエキスパート達に、がんを正しく知り、がんにつきあっていくことのイロハについてインタビューしたのをまとめたものです。その中で、全くの素人さんである彼女に、ある先生が「クオリティー・オブ・ライフって、聞いてことありますか？」とたずねたら、「人生の質ってということですか？」と返していたのが印象的でした。通常、私たちの業界では「生活の質」と訳して用います。訳し方でずいぶん印象が違いますね？例えば、患者さんがひとりでトイレに行けるようになったとか、痛みで動けなかったのが治療でよくなったら「クオリティ・オブ・ライフ(QOL)が改善したね」、といった使い方をすることが多いです。でも、本来の英語の「ライフ」の意味はもっと広いはずで、私たち医療者が患者さんと接するのは病気の時だけです。けれどその患者さんには今までも、これからもその人の人生がある。なのに、患者さんの立場になったとたんに「患者さんとしての人生」が始まってしまうと誰もが感じているのではないのでしょうか。

当院のようながん拠点病院では、病気のせいでその人らしい人生が途切れないように、あるいは一度は失いかけた自分の人生を取り戻すために、いつでもドアを開けています。その窓口の一つが緩和ケアでもあります。クオリティ・オブ・ライフとは、まさに「人生の質」、「生きざまの質」のことに他ならず、私たちの仕事は、それをどうすれば失わずに生きていけるかという闘いでもあります。病気や治療の辛さを最小限にするためには何が必要か、治療や療養を続けながらご家族との日常をどうやって保つのか、そういった気がかりや心配を受けとめるところからすべては始まります。

映画の中のフレディやアリーのようにドラマチックではなくとも、あなたやご家族が病気を得ても、それまでの価値観や生き方を諦めてしまうことの無いように、時には病を得たことからの気付きにも寄り添えるように、支援したいと思います。ですから、あなたにも、ぜひ普段から遠慮なく「正直で、生々しい人生」を生きてほしいと願います。ちなみに私がそれを欲望通りにやると、かなり面倒臭いおじさんになりかねません。そこは気を付けたいと思いますが、それも含めての私なのでなんとか周りに受け止めてもらおうと思っています。